

書評

『評伝牧口常三郎』

有本昌弘

1 『評伝牧口常三郎』(2017.6.6刊行)の意義

『評伝牧口常三郎』が2030年まであと10年という大事な時期に発刊された意義は誠に大きい。本書は、牧口という巨匠、偉大な先駆者を捉える方法として、第1章 北海道で教員となる、第2章 地理学の探究、第3章 教育の理想を求めて、第4章 人生の転機、第5章 価値を創造する教育、第6章 すべての人々の幸福のために、という章立てで展開している。この本の発刊の過程で新しい史料が数々発見されたことは、丹念に懸命に、時に探偵のようにしつこくあぶり出す大変な作業があったと推察され、感嘆の思いである。さらには、歴史を認識する素材、史実に基づいた牧口の思想哲学を深く捉える素材が網羅されており、後世に長く残るものであるといえよう。

手元にある創価教育学体系の原本の表紙には確かに(後世を照らす)ランプの図が刻印されており、あたかもその意味を継承している労作である。

2 評者が牧口常三郎を研究する理由と受けた影響

評者の研究課題は、カリキュラム・アセスメントと教師教育であり、教育実践と教育政策の研究にコミットして来た。評者は、創価教育学に注目しピアジェの情意論と牧口価値論の類似性を主張した波多野完治に触発された。ピアジェが亡くなった1980年あたりからである。創価教育学体系は世界の奇書であり、全国の教員が読むべきだと評した波多野の主張は、確かに的を得るものであったと思う。評者は、一般読者に呼びかけるつもりでそのエッセンスを伝えるインターフェースの役割を果たしたいと思い、研究生活を送ってきた。その中で、数々の見方・考え方と向き合い時に回り道し格闘する中で、学説には国産のペダゴジー(教授学)としていくつもの宣揚すべき水脈と鉱脈があることに気づいた。

現在東北大学に奉職しているが、この評伝にも、東北大学に関係の深い初代総長(1911-1913)の澤柳政太郎はじめ、石原純(1917-1920)、教育学部に関連の深い篠原助市(1923-1930)、田邊寿利(1953-1956)をはじめ、東北に関わる新渡戸稲造、郷土会での尾高豊作、小田内通敏などの人物が、数多く登場する。東北大学第17代総長西澤潤一も創価教育学説に基づく戸田城外

Masahiro Arimoto (東北大学教授)

による指導算術に学んだと、評者は知悉している。我々の未来を先回りしている時代の先覚者・プリカーサー (precursor) なのである。評者は、ようやく「面白くて仕方がない本」(波多野 1979) であることに強い共感と共鳴を覚えるに至っている。

3 『評伝牧口常三郎』の本で特に大きく興味を持った点

評者は、戸田城外との出会いがあるなど、今から百年前の 1920 年前後の時期にある種のエッセンスが詰まっていると考え、第 3 章 (1905-1912)、第 4 章 (1916-1922) を中心に見ている。第 3 章 教育の理想を求めて、では、通信教育 (1905-)、富士見小学校 (1908-)、文部省勤務 (1910-13)、郷土科研究の出版 (1912) という体系への流れが見られる。その中でも、1911 年の津江調査研究が特に重要であったことを初めて知ることができた。郷土会 (1910-1918) の存在自体が世界でもユニークであり、1つの「点」になる。第 4 章 人生の転機では、大正小学校 (1916-)、西町、三笠、白金小学校校長 (1922-) の経歴がある。

こうしたいくつもの「点」とその他の「点」とを、線で結び、体系に迫る伏線にもなると思われる事柄を推測することにした。

1917 (大正 6) 経済哲学の諸問題 (左右田喜一郎) 評価社会
1918 公開研究授業と専門家コミュニティとしての教育教授研究会
1919『学習経済論』の中で単著論文出版、ジョン・デューイ来日、戸田との出会い
1922 戸田とともにアインシュタイン講演会出席と聴講
1923 関東大震災とそれ以降の深刻な経済恐慌
1921 (大正 10) 価値体系論 創造者価値)
1922 (大正 11) 文化価値と極限概念 (左右田喜一郎)

(1) 公開研究授業と専門家コミュニティとしての教育教授研究会 (評伝、213、225-6 ページ)

牧口が大正小学校校長時代、澤柳政太郎会長を前に行ったデモ授業のエピソードである。澤柳は、帝国教育会 (1896-1948) の下部組織である教育教授研究会 (1910-nd) 会長であった。元文部次官であった澤柳は、教育内容策定のために成城小学校を前年の 1917 年に設立した。今日日本の授業研究は世界にレッスンスタディとして広がっているが、校長によるレッスンスタディは現在でもあまり聞かれない。波多野完治は、大正新教育のエッセンスが凝縮され授業研究の萌芽が確かに示されうると評価している。このころの経験が、後に創価教育学体系第 4 巻の「詰め込みか、知識の構成か、興味の喚起か」という体系の問題設定に至る伏線となっているのではないかと考えている。また、体系の全体が今日でいう社会構成主義の学習論からスタートしており、特に英米で今日主流である個人主義に基づく行動主義・心理測定パラダイムとは真逆であると思われる。

おそらく、未完であった第 5 巻に連なる提案であったであろう、学習経済、主体と環境の相互

作用、「関係」に「二重の目的」を持たせた社会文化的な活動理論である。学校の職員全員が参加して事に当たる組織的学習と「評価の文化」、プロのコミュニティに通じる話の嚆矢ともいえる。さらに、教室と全国組織との間の往還を含めると日本が教育立国を目指していたのではないかとと言えるくらい、教育政策史としても興味深い。このエピソードは社会正義と人間観をはじめ西洋の理想を孵化するアイデアに満ちている。

(2) 『学習経済論』の中で単著論文出版（評伝、189,202 ページ）、戸田との出会い（評伝、236 ページ）

評伝が書きとめている、教育論叢編集部編纂『学習経済論：教育能率の増進に関する研究』に「学習経済より見たる地理教授の改造」を執筆した牧口は、この頃、「学習経済」を価値論から再考する引き金を引いたと推測される。

同書に「教育的価値論」を寄稿している城戸幡太郎は「教科が授業と学力とを評価（アセス評者注）する貨幣の如き媒介概念となって、社会のために有利なる教科に還元せらるるにあらざれば学力も授業も価値を有せざるに至るのである」と述べている。ここでは、化合物から複雑さを取り除く化学反応を教科に求めこれを媒介に授業（主体）と学力（対象と成果）を描いており、驚きである。誤解を恐れずにいえば、知識が知識を生む活用型学力を対象そして成果にして、コンテンツをツールあるいはリソースとして媒介している。教科を利的価値の典型である「貨幣」のメタファーで記述し、使用価値と交換価値の内的矛盾から派生する知識の拡張、境界を超えて結び合う文化・歴史的活動理論と社会文化への萌芽なのかもしれない。

なお今日では、利的価値は、ドーパミンというポジティブな肯定的学習環境にも該当すると推測される。

(3) 戸田とともにアインシュタイン講演会出席と聴講（評伝、276 ページ）

澤柳が東北大学理学部の教授に招こうとしたのが、アインシュタインである。その言説は、現在も世界で引用される。アインシュタインはいう。「成功は、好奇心、集中力、忍耐力、自己批判から生まれます」「好奇心には、存在する独自の理由があります。永遠、生命、現実の驚くべき構造の謎を熟考するとき、人は畏敬の念を抱かざるを得ません。毎日このミステリーのほんの少しだけでも理解しようとすれば十分です」。ここでは、認識論と価値が交差する利的価値を人間性の1つ、好奇心から述べている。この言説からは、推測でしかないが、真を価値論から外し、利美善の価値論に仕上げたヒントがあるかもしれない。好奇心は、ポジティブな利的価値に限りなく近いエネルギーであるからである。好奇心自体は、魅力的なものに関心が向くこと、自発的な調査・学習や物事の本質を研究するといった知的活動の根源となる感情・探究心、未知の物事に対する行動や精神的な働き、探究心、興味関心とも言い換えられ、幸福な人ほど好奇心も高いとされ、今日、OECDでも最も注目される概念へと展開することができよう。

さらに、日本での当たり前の、知識の協働探究 group quest for knowledge、相互の利益 mutual benefit は、利的価値に留まらずに、善となる。しかし、牧口は、日本での当たり前をさらに推し進めて、ネガティブな感情をもポジティブなものに変えていくことによって、未来に向

けて積極的な学習環境自体を「絆」など社会文化が作り上げているものへと転換した。

(4) 関東大震災とそれ以降の深刻な経済恐慌（評伝、278 ページ）

上記の大きな引き金になったのが、52歳の時に白金小学校校長時に、出会った関東大震災である（比較する気は毛頭ないが、2011年の東日本大震災を、私は同じ歳に経験している）。その後の、第4巻を書き進める上でも達観があったと推察される。学習経済という教授学習において能率を求め、時間労力に対して、最大の効果を発揮する利的価値に加えて、こうした「精神の奥底に潜んでいる宗教心」（牧口 1934 p.81）に繋がるものが、共存していた。西洋世界の「癒し」ではなく、よりダイナミックな「絆」である。

1はペダゴジー、2と3はアセスメント、4はカリキュラムとなるが、今日世界で要請されている強いリンクが出来上がる。

4 今後の展開と展望、期待

このように、創価教育学体系は、数々の「点」から線、線から面にできる宝の山である。流通分としての郷土科含め各科教育学の展開となればなおさらである。序文、本文として、近年の生涯発達に通じる自己調節学習に通じるアセスメント・クライテリアの議論である。すなわち、目標とクライテリア（尺度や秤）が一致する（評価的判断がある）場合としない場合がある。こうして、実践から評価と認識とを分けることの重要性から出発した牧口自らの実践から、次世代の人間は感覚を研ぎ澄ましていく必要がある。

牧口は、1925年以降1930年までの間に、『社会学と哲学』（山田吉彦訳）（のちに田邊寿利など）から、自らの実践をデュルケム理論で補強し体系にしていた。この書は、英語圏での出版（1974）よりもいち早く、フランス語の原典（1924）の出版の翌年に日本語に訳された（1925）ことを考えると、世界で初めて（今でも稀であるが）である。自らの実践に、価値、評価の問題を貪欲に取り込んだと言える。しかも、西洋流の社会科学上の抽象的な概念主導ではなく、実践者目線と感覚で、時に生命と宇宙を知覚し解釈する枠組みで、自らのリアルな現実からスタートし、歴史社会文化を踏まえて展開され、個人と集団による包括的な信念や価値である「世界観」も含まれていることが、驚きなのである。評者は、ここから多くを学びたい。今日の社会文化学習理論で、デューイやヴィゴツキー、デュルケムを介して当時を見ていくことの意味がここにある。

すなわち、好奇心自体も自己効力感のみでなく人材・知財・郷土財という共有財産を媒介にした集合的効力感に支えられ、財はサービスとしても読み替えられ、ダイナミックな価値創造のフレームが出来上がる。そこから、そのフレームは、「誰人たりとも置き去りにしない」ウェルビーイング（幸福）を根底にもつ2030年に向けたSDGs（持続可能な開発目標）と重なる。ユネスコもOECDも2030年を目標にしているが、今日的危機を克服する糸口が、評伝の中に散りばめられた「点」に多くある。当時の生業（なりわい）などの概念は、今日の人口減の中での持続可能な社会に向け防災・減災に直接間接に関わる概念として、世界の縮図として地元郷土から始まる。

これは、牧口が構想した、学習者が郷土と心情的関係を自然にもつと考え、目的としての郷土愛とした郷土科、すなわち枝葉である教科を根っここの部分郷土科で支える「喬木メタファー」（牧口 1934）としてのカリキュラムとなり、今日という世代間の対話にも通じる。「点」と「点」をつなぎ、線と線をつなぎ、そして面と面をつなぐことにより出来上がる当時の立体（同時代人との相互の関わり）をさらに「点」としていくことで、パンデミック（広範囲に及ぶ流行病）などを含めた地球環境危機を前にした今日的状況と様々に重なり、困難や危機克服の方途が見出されるかもしれない。

このように、今から百年前の 1920 年前後は、こうして、時代精神が凝縮された偶発性の瞬間が垣間見て取れ、本書のいう「教育の理想を求めて」「人生の転機」が重なる時期であった。そして、その前後（第1章から第6章）の中にある数々の「点」を線で結ぶことにより、場合によっては視覚化可視化、紡いだ糸を図示することにより、価値創造の思想が織りなす全体像と生み出された必然性が見えてくる。その点で、本書は極めて有益である。

参考文献

- 波多野完治（1979）「創価教育学は世界教育古典」『復刻・創価教育学体系解題』第三文明社
牧口常三郎（1934）『創価教育学体系』第4巻